

Bangladeshにおける観光の動向

—観光行動に関する質問紙調査より—

中 谷 哲 弥

1. はじめに

かつて最貧国として知られていた Bangladesh は、経済成長によって 2015 年には世界銀行によって「中所得国」（低中所得国）とへ格上げされた。同国における縫製業の成長はよく知られてきたところであるが、今日ではこれに加えてジュート製品や皮革製品などの伝統産業、さらには造船、医薬品、IT、自転車・冷蔵庫・エアコン・薄型テレビ・携帯電話組み立てなどのライト・エンジニアリング産業など、様々な新産業も成長している。これにより、国内総生産に占める製造業の割合は 2000 年代半ばには農林業を上回るようになっている [山形・村山 2014: 2]。経済成長とともに、3 章でみるように国民の平均所得も年々上昇を示してきた。国内市場も拡大し、都市部ではスーパーマーケット等大規模小売店が登場して、その数を増やしている [山形・村山 2014: 3]。

本稿は、このような経済成長下における人々の観光行動に注目する。その問題意識は、インドにおける観光行動を扱った中谷 [2010: 2014] と共通している。すなわち、インドにおいても経済成長とともに消費の拡大が進み、人々の消費行動が注目されてきたが、その焦点は耐久消費財の購入、つまりモノ消費にばかりあてられてきた。そのために、経済成長に伴う所得の向上と消費社会化のなかで、実際に人々の生活がどのように変容してきたのかについて、一面的にしか捉えられてこなかったのではないか。そこで注目した

のが観光である。インドでは所得の向上やホワイトカラー層の拡大によって、仕事と余暇の領域が弁別されるいわゆる「余暇社会」が到来しつつあると考え、人々の生活やライフスタイルの在り方を観光行動という視点から捉えることを試みた。いわばモノ消費よりもコト消費に注目したのである。

その結果、インドでは想定以上に人々は観光のために広範囲に各地を訪問していること、観光が人々の関心の的となっていること、レジャーを目的とする移動が拡大していること、ヒル・ステーションのような独自の国内市場も成立していることなどが判明した。本稿は、バングラデシュにおいても同様に、観光行動に注目することで、経済成長下での人々の生活やライフスタイルの一端を明らかにすることを目的としている。インドにおける調査[中谷 2014]と同様に、観光行動に関する質問紙調査をバングラデシュでも実施した。どちらも2010年2月に実施したものである。本稿ではこのバングラデシュでの調査結果の分析を中心に行っている。世帯所得等の指標に関しては、調査時の2010年当時のデータに留意しながら論を進めている。

以下、2章ではバングラデシュにおける観光の現状について概観した後、3章では主としてバングラデシュ統計局によるデータから国民の所得状況について確認する。そのうえで、4章ではダカ大学において学生を対象に実施した質問紙調査の結果について詳細に検討し、5章ではインドでの調査結果との比較を含めながら考察する。

2. バングラデシュ観光の現状

国際観光市場において、バングラデシュを含む南アジア地域はきわめてマージナルな存在である。国連の世界観光機関（UNWTO）によれば、2010年に全世界で動いた9億4000万人の観光客のうち、南アジア地域（7カ国）¹を訪れた観光者数は約1,150万人で、わずか1.2%を占めるにすぎない[UNWTO 2012: 4]。バングラデシュへの訪問客は約30.3万で、南アジア地域内に限っても、そのわずか2.6%を占めるにすぎない[UNWTO 2012: 8]²。

バングラデシュでは政策的にも、長らく貧困緩和や経済開発などの課題が優先され、観光に関する政策の優先度は低かったといわざるを得ない。しか

しながら、2009年の政権交代を機に、徐々に観光にも目が向けられることとなり、新しい観光基本政策の策定や法整備がなされるようになってきた[中谷 2012: 198]。こうした動きの一環として、世界観光機関の調査団によるバン格拉デシュの観光実態調査が実施され、その報告書[UNWTO 2010]が作成されている。この調査団の目的はバン格拉デシュ観光の現状と課題を見極め、観光政策の推進を支援することであった[UNWTO 2010: 3]。

同報告書に基づき、バン格拉デシュにおける観光の現状を捉えてみたい。まずバン格拉デシュの観光関連産業は2007年時点でGDPの1.5%、雇用全体の1.2%(75.2万人)を占めるにすぎず、成長中の部門とはいえ非常に小規模であると同報告書は指摘している。また、成長は主として国内観光、ビジネス観光、親族・友人訪問によるものであり、海外からの休暇観光はきわめて低調でほとんど経済的な貢献をしていないとのことである[UNWTO 2010: 5-6]。

さらに同報告書は、海外からの訪問客数のうち、真に休暇目的で訪れるのは10%未満であろうと分析している[UNWTO 2010: 15]³。つまり、海外観光客数(International Tourist Arrivals)の統計には、実際には海外からの商用のビジネス客や援助関係者などが多く含まれており、休暇を楽しむために訪れる純粋なレジャー客はごく少ないのである。バン格拉デシュへのインバウンドが低調なことには様々な要因が存在しているが、観光資源に関して同報告書が指摘する点、すなわちシュンドルボン(マングローブ林が広がる世界自然遺産)を除いては、バン格拉デシュは同じような観光資源を有する他の南アジア諸国と競合してしまうため、むしろ競合を避けて独自の観光商品を生み出し、ニッチな市場の構築に勤しむべきという指摘は、同国の国際観光市場における立場を端的に表している。つまりは、後述するようにバン格拉デシュにもムガル朝の歴史遺産はあるものの、インドへ行けばタージマハルなどもっと壮大で目を奪われるような同時代の観光資源が多数存在しているため、わざわざあえてバン格拉デシュを訪れる魅力に乏しいのである。

バン格拉デシュのような途上国では、外貨獲得や雇用の創出の観点から、観光といえばまずは国際観光(インバウンド)が注目され、政策課題として取

論文

り上げられるのが通常であろう。しかし、すでにみたように同報告書において、観光分野の成長は国内観光、ビジネス観光、親族・友人訪問が担っていると記されていたように、バングラデシュにおいても個人所得の向上に伴う国内観光需要への期待は高まっている。同報告書は、国内観光については次のように述べている。

国内市場は、バングラデシュの都市中間層や上層の所得の変化により急速に拡大してきた。増加した富や教育はライフスタイルに変化を与えてきた。国内市場は外国人訪問者向けと同様のいくつかの資源を要することから、国内市場の基盤は、国際市場にも裨益する観光インフラの開発のために活用できる[UNWTO 2010: 28]。

2009年に世界観光機関の調査団が訪問した頃、バングラデシュ政府内では新たな観光政策の作成作業が進んでおり、2010年に「観光政策 (National Tourism Policy)」として策定された[Ministry of Civil Aviation and Tourism 2010]。同計画では、観光政策の主要目的として、「生態系のバランスの維持や生物多様性の保護を伴いながら、観光産業を開発・持続可能なセクターのひとつとして確立すること」を掲げ、それは雇用創出、地元の人々と地方の政府組織を巻き込んだ社会経済の発展を通じてなされるとしている。また、具体的な政策目標のひとつとして「廉価な国内観光の開発」を掲げ、次のように国内観光の開発について言及している[Ministry of Civil Aviation and Tourism 2010: 4-5; 8]。

現在、バングラデシュの購買力平価⁴や人々の熱意は旅行に向かっている。外国人観光客を惹きつけてきたこれまでのプロセスは、国内観光の開発にも向かっている。それゆえに、廉価な宿泊施設を含むインフラ整備が進められるべきである。また、主な宗教的・考古学的遺跡では、民間業者が国内観光客のための廉価な宿泊施設を建設しようという場合には、低利での貸付措置をとることも必要である。

「観光政策」の内容は全般的にかなり総花的である。国際観光機関による調査団が入ったときにはすでに作成途上にあり [UNWTO 2010: 27]、調査団の報告書の発行年と「観光政策」の策定年も同じであることから、同報告書の指摘がどの程度取り入れているのかも明確ではない。しかし、どちらもバングラデシュにおける個人所得の向上が国内観光を拡大していること、インフラ整備などに関する国内市場と国際市場の開発は相互に裨益できるものであることを指摘している。「観光政策」の方は、「廉価な」国内観光市場の発展を強調しているが、いずれにせよ、第一義的には国際市場の拡大をにらみながらも、国内市場への期待も示唆するものとなっている。

3. バングラデシュにおける経済成長と世帯所得の変動状況

経済成長によって「中所得国」(低中所得国)とへ格上げされたバングラデシュであるが、これと連動する形で国民の所得を示す諸指標も軒並み上昇を示している。経済成長に伴う格差の拡大も指摘されているところであるが、すでに述べたように、世界観光機関とバングラデシュ政府ともに、国民の所得が増加してきたことが国内観光の拡大に貢献しているとの認識を示している。以下、国民の所得レベルの向上に係わるいくつかの指標を確認しておく。

まず、一人あたりの名目 GDP は 2000 年に 410 米ドル (20,778 タカ [バングラデシュの通貨=taka])、2005 年に 485 米ドル (30,049 タカ)、2010 年に 763 米ドル (52,773 タカ)、2015 年に 1,221 米ドル (94,823 タカ)、2019 年に 1,816 米ドル (152,623 タカ) と急速な増加をみせている⁵。2000 年を基準とすると、2010 年はその約 1.9 倍(タカ・ベースでは 2.5 倍)、2019 年は約 4.4 倍(同 7.3 倍)の増加である。

バングラデシュ統計局によれば、最貧困層 (Lower Poverty Line に該当する世帯) の割合は 1991-92 年には 41.1% であったのが 2000 年には 34.3%、2005 年には 25.1%、2010 年には 17.6%、2016 年には 12.9% へと減少してきた⁶ [Bangladesh Bureau of Statistics 2011: 61; 2019: 56]。

同じく、バングラデシュ統計局による世帯所得に関する調査 [Bangladesh Bureau of Statistics 2019: 29-30] によれば、2000 年に 5,842 タカだった全

国平均の世帯あたり月収は、2005年には7,203タカ、2010年には11,479タカ、2016年には15,988タカと増加してきた（名目値）。2000年を基準とすると、2010年はその約2.0倍、2016年には約2.7倍の上昇を示している。ただし、インフレ率は2000年時点では2.2%であったものが、その後は上昇基調となり、2005年では7.0%、2010年では8.1%を示していたことには留意すべきである⁷。物価上昇分をカバーしつつ、あらゆる所得階層で一律に実質的な所得が上昇したというよりも、次に検討する所得ジニ係数が示すように、かなりの格差を伴いながらの所得変動とみるべきであろう。

所得分配に関しては、これもバングラデシュ統計局によれば、所得ジニ係数は2000年に0.451、2005年に0.467、2010年に0.458、2016年に0.482となっている。2010年には一旦格差は縮小しているように見えるが、2000年以降所得分配の格差は拡大基調にあるといえよう。ちなみに同統計局のデータでは、所得分配の特性を捉えるために所得階層を十分位数で分類（全体の世帯数を所得順に10%ごとに分類）したデータも収録されている。2010年でみると、最下位10%の世帯の所得は全体の2.00%を占めるのみであるのに対して、最上位10%の世帯は全体の35.85%を占めている。また、下位から70%までの各分類世帯が占める所得割合はすべて10%未満であるのに対して、上位30%の世帯ではすべて10%を超えており、この上位30%の世帯で全体の所得の63.29%を占めている。所得分配の格差は上位30%の世帯とそれ以下の世帯の間で大きく開いているのである。[Bangladesh Bureau of Statistics 2007: 28; 2011: 30; 2019: 31]。

最後に、いわゆる中間層をめぐる議論についてであるが、うえにみてきたように、これだけ所得に係わる数値の変動が激しいと、明確に中間層を設定することは容易ではない。インドにおける質問紙調査ではインド国立応用経済研究所による設定（定義）がある種の権威を有し、各方面において多く参照されていたことから参考としたが、この研究所による設定についても、全般的な所得レベルの変動に応じて、設定は年代によって大きく異なっている[中谷 2014: 9]。しかし、バングラデシュに関しては、例えば中間層が占める人口割合に関する議論をみるだけでも、設定する機関によって7%から20%

までと幅があり、議論が定まらない状況にある [Mahmood 2018]。従って、本稿では明確に「中間層」を定めることはしない。その代わり、次章の第2項において、バングラデシュ統計局による世帯所得調査と質問紙調査の対象となった世帯の所得状況を比較することで、バングラデシュにおける所得階層の状況と質問紙調査対象世帯の特性については確認をしておきたい。

以上の通り、バングラデシュにおいては2000年以降、貧困率は低下し、格差はあれども所得は向上してきたことが、各種の指標によって示されている。このような動向を受けて、冒頭に触れた世界観光機関やバングラデシュ政府の見解同様に、本稿においても所得レベルの向上は観光の拡大にも貢献すると考えておきたい。よって、次章で検討する観光行動に関する質問紙調査は2010年に実施したものであることから、バングラデシュの経済成長のさなか、観光が拡大しつつある状況における中間報告と位置づけたい。

4. 観光行動に関する質問紙調査

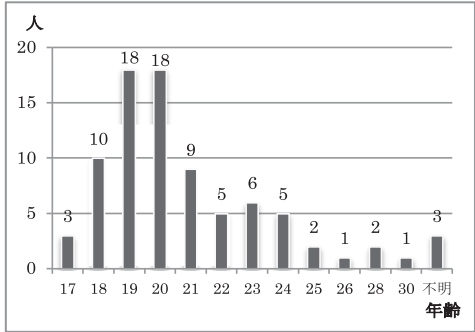
(1) 調査方法

調査はダカ大学社会科学部人類学科の学生を対象に実施した。同学科の Zobaida Nasreen 准教授宛てに事前に調査票を2010年1月中に送付して学生への配布と記入を依頼し、筆者がダカを訪問した2010年2月3日に回答記入済みの調査票を計83名分入手した。ダカ大学は1921年に設立された国立大学である。

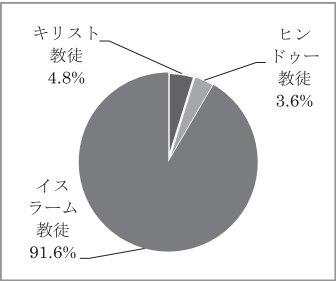
質問項目は末尾の添付(調査票)の通りである。年齢、学年、出身地、宗教、世帯主の職業、世帯の年間所得などの属性とともに、調査時点から遡って5年間の観光経験について記述してもらった⁸。

(2) 調査対象の属性

83名の回答者について、その属性について確認しておきたい。まず性別は女性が27名、男性が56名であった。年齢構成は図表1「年齢構成」の通り、18歳から21歳までが大きな構成比を占めているが、17歳から30歳までに渡っている。



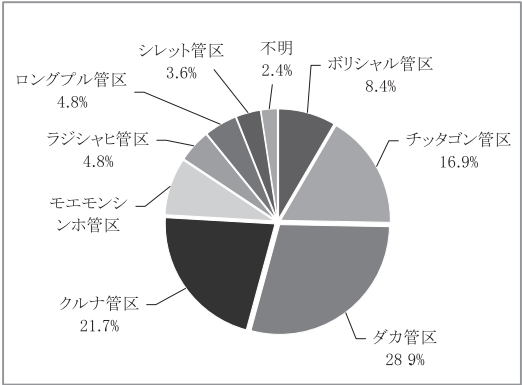
図表 1 年齢構成



図表 2 宗教構成

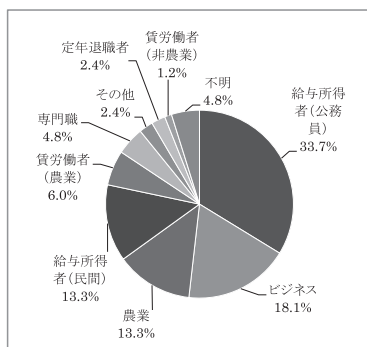
図表2「宗教構成」でみると、イスラーム教徒が91.6%、キリスト教徒が4.8%、ヒンドゥー教徒が3.6%となっている。2011年の国勢調査(全国)によれば、バングラデシュでは人口の90.4%をイスラーム教徒が占めているため、宗教別のサンプル数はややイスラーム教徒の構成比が高い。一方、キ

リスト教徒とヒンドゥー教徒は国勢調査ではそれぞれ0.3%と8.5%を占めているので、サンプルはキリスト教徒の構成比が高い反面、ヒンドゥー教徒は低い。また、キリスト教徒よりも多く、国勢調査では0.6%を占める仏教徒はサンプルには含まれていない [Bangladesh Bureau of Statistics 2015: 28]。



図表 3 出身管区の内訳

図表3「出身管区の内訳」は出身地を示している。2020年12月現在では、バングラデシュには8つの管区 (division) があり、それら管区のもとに計64の県 (zila/district) がある⁹。ダカ大学はバングラデシュでは最も古く、また国立のトップ大学であることを反映して、サンプルにはこの8つの管区すべての

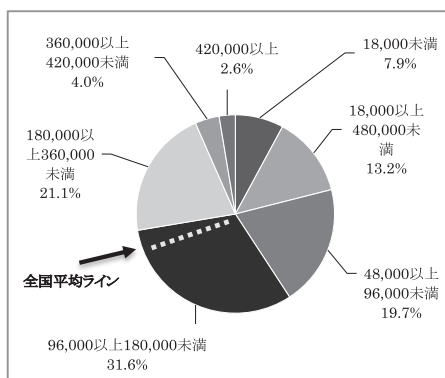


図表4 世帯主の職業

出身者が含まれている。サンプル83名のうち、ダカ大学が所在する首都ダカ（ダカ管区の一部）の出身者は7名のみであり、全土から学生が集まっていることがうかがわれる。

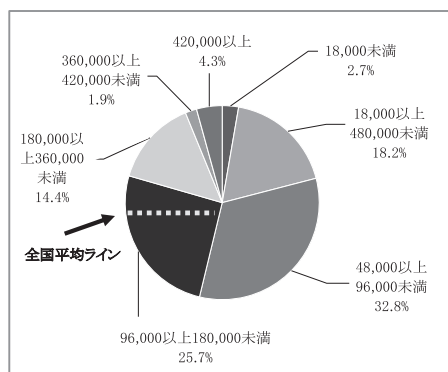
図表4「世帯主の職業」は、学生が属する世帯の世帯主（保護者）の職業について示している。まず、給与所得者が公務員33.7%と民間13.3%をあわせて、計47.0%と半数近くを占めている。次いで、ビ

ジネス従事者が18.1%、農業が13.3%となっている。その他、賃労働者が農業6.0%と非農業1.2%をあわせて7.2%、専門職が4.8%となっている。ここで比較のために、バングラデシュ政府統計局による統計年鑑が示す「雇用形態」のデータを引用すると、バングラデシュ全体では「自己雇用/雇用者」は40.9%、「被雇用者」は17.4%、「日雇い」が19.6%などとなっている[Bangladesh Bureau of Statistics 2012: 67]。本調査におけるサンプル学生の世帯主の職業構成比においては、全国統計よりもより多くの「給与所得者（被雇用者）」が含まれ、「ビジネス」「農業」などの「自己雇用/雇用者」はやや少なく、「賃労働者（日雇い）」はかなり少ないとみることができる。



図表5 年収別の世帯割合(単位: タカ)

最後に世帯年収について確認しておきたい。図表5「年収別の世帯割合」は学生が属する世帯（保護者を含む）の年収を示している。図表6「バングラデシュ統計局調査・年収別の世帯割合」は、バングラデシュ統計局による2010年の全国の所得と支出に関する調査から引用した、年収別の世帯割合である[Bangladesh Bureau of



図表6 バングラデシュ統計局調査・
年収別の世帯割合(単位：タカ)

Statistics 2011]。同調査は5年に一度程度実施されている。同調査による区分はさらに細分化されているが、細かすぎてグラフ化するには不向きなために、4つの区分をひとつの区分に統合する形に修正してある。また、月収額を単純に12ヶ月分に乗じている。図表5の方の年収区分も、比較のために、これとあわせている。なお、質問紙調査当時、バングラデシュ通貨

であるタカ(taka)の交換レートは1タカ=1.298円であった。

バングラデシュ統計局による調査と本稿の質問紙調査は同じく2010年時点のものとはいえ、異なる調査手法に基づいており、単純な比較は妥当ではないが、質問紙調査回答者の属性を検討するための手がかりとして検討しておきたい。まず、調査の実施前には実のところ、対象が大学生(子どもに高等教育を授けることが可能な世帯)であることから、その世帯の所得レベルは全般的に高めに偏っているのではないかと予想していたが、実際には全所得階層に渡っていた。次に、所得階層分布のひとつの参照点として、前章で述べた全国レベルでの世帯所得の平均額を取り上げてみたい。バングラデシュ統計局によれば、2010年の月額所得の全国平均は11,479タカであった。これに12ヶ月分を乗じると137,748タカとなる。図表5と図表6には、この全国平均ラインを示している。これを参照点とした場合、質問紙調査世帯の67.1%、バングラデシュ統計局調査による全国レベルでの世帯の73.2%が、この全国平均ライン以下に属しており、この点からも質問紙調査世帯は全国的な所得分布状況からかけ離れたものではないといえよう。

しかしながら、各表において設定した所得階層区分の割合に注目すると、96,000タカ以上の区分の割合は、図表6では46.3%であるのに対して、図表5は59.3%となっており、質問紙調査世帯の方が全国的な所得状況よりもや

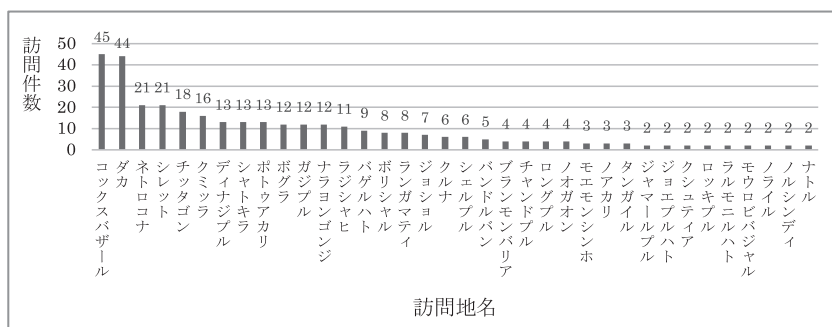
や高めの世帯が多いとみることもできる。

(3) 訪問地(県別)

ここからは観光行動に関する調査結果について検討していきたい。調査では、観光経験(観光実施回数)について、延べ381件の回答を得た。平均すると、ここ5年間で一人平均4.6回の観光経験を有していることになる。その訪問地は不明の11件を除き、国内366件、海外4件であった。

まず、図表7「訪問地(県別)」は、国外を除く国内の訪問地のうち、訪問件数が2件以上のものを示している。訪問県とその具体的な主要訪問地、そしてそれらの訪問地の性格を明確にするために、訪問目的についても言及しながらみていきたい。訪問件数が10件を越える訪問地について取り上げる。

訪問件数が45件と最も多いコックスバザール県は、国内ではいわずと知れたバン格拉デシュ南東部のビーチリゾートである。ベンガル湾に面したコックスバザールは、連続したビーチとしては世界最長の約125キロメートルの全長を誇る。また、回答には本土を離れたモヘシュカリ島やバン格拉デシュで唯一の珊瑚礁を有するセント・マーティン島も含まれている。いずれもリゾート地ではあるが、本調査では大学の学科による訪問「学習」が9件と帰省が1件含まれているために、目的別では「レジャー」は68.9%となっている。しかし、これらを除くと「レジャー」との回答は88.6%となり、リゾート地としての認識が高いことは明らかである。



図表7 訪問地(県別)

コックスバザールに次ぐ44件の訪問先となっているダカ県は、首都が所在するダカ市とその周辺郡から構成されている。ダカ市内では、17世紀にムガル朝の第6代皇帝アウラングゼーブの息子によって建設されたラルバグ・フォート(砦)、19世紀にダカのナワーブ(領主)の館として建設され、1992年からは国立の博物館へと転換されたアフシャーン・モンジル博物館、バングラデシュ国立博物館のほか、国立動物園や民間の遊園地(ファンタジー・キングダム)などが主な訪問先となっている。ダカ市郊外では、市内から自動車で1時間ほどの距離にあるシャバールに所在する独立記念碑も多く訪れられている。訪問目的としては「レジャー」75.0%、「学習」13.6%、「親族・友人訪問」6.8%となっている。「学習」とは、大学や学校による訪問である。

ダカにおける訪問先の特徴としては、海外向けのガイドブックでは主要な訪問地として紹介されているような場所が含まれていないことを指摘できる。例えば、ムガル朝以来の歴史を有するオールド・ダカの市街地に関しては、上記のアフシャーン・モンジル博物館もオールド・ダカに位置するものの、外国人観光客にとっては定番といえるシャンカリ・バザール(ヒンドゥー教徒の職人街)、スター・モスジト(モスク)、あるいは小舟から外輪船まで多種多様な船舶が往来するショドル・ガト(船着き場)やアルメニア教会などは訪問対象とはなっていない。公園のようにきれいに整備されているラルバグ・フォートや博物館など、バングラデシュの生活感や喧噪とは無縁の施設の方が訪問先となっているのである。

ネトロコナ県はバングラデシュの北東部に位置しており、訪問地としては広大な湿地帯などの自然資源はあるものの、本調査においては21件のうち20件は大学の学科主催による貧困状況調査のフィールドワークへの参加であり、「学習」を目的としていた。残り1件の詳細は不明である。

同じく訪問件数が21件となっているバングラデシュ東部のシレット県は、バングラデシュ国内では自然景観や茶園が多くの人々を惹きつける主要な観光地として認識されている。バングラデシュでは珍しい採石場のほか、風光明媚な河川や森林の景観、そして茶園を有するヒル・ステーション(高原保養地)となっているジャフロンや、かなりの高低差の滝を擁する景勝地マド

ブクンドが主要な訪問地となっている。訪問目的としては半数を超える12件(以下、サンプル数が少ないのでパーセンテージではなく件数で示す)が「レジャー」と回答しているが、「親族・友人訪問」「学習」がともに3件ずつみられた。

訪問件数18件のチッタゴン県はバングラデシュ南東部の港湾都市であり、バングラデシュ第2の都市として知られている。しかし訪問先としてはチッタゴン市街地というよりも郊外が大半である。コックスバザール同様にベンガル湾に面するビーチリゾート地であるポテンガ、インドやミャンマーと接し多様な少数民族が暮らすチッタゴン丘陵地帯、多数のモスク、聖廟、ヒンドゥー教寺院、仏教寺院を抱える巡礼地であり近年ではエコツーリズムの目的地としても知られるシータークンドなどが主要な訪問地となっている。訪問目的としては、「レジャー」が10件、「学習」と「親族・友人訪問」が各3件などとなっている。

訪問件数16件のクミッタ県には、県都クミッタの西側約8キロメートルに位置するラルマイーモエナモティ丘陵地帯に広がる仏教遺跡群が存在する。それら7世紀から12世紀にかけての仏教遺跡群はモエナモティ遺跡として知られている。ここへの訪問件数が12件と最も多い。また、長年農村開発に関わり、バングラデシュではよく知られているバングラデシュ農村開発アカデミー (Bangladesh Academy for Rural Development/1959年設立) への訪問が2件、結婚式への参加が1件みられた。訪問目的は「レジャー」と「学習」がともに7件となっている。「学習」は学校による企画であるが、すべてモエナモティ遺跡を訪問している。

ディナジプル県(訪問件数13件)では、壮麗なテラコッタ様式によって18世紀に建設されたカントノゴル・ヒンドゥー教寺院や、公園、池、乗り物、人工の造形物などから構成されるショプノプリ・人工遊園地が主要な訪問地となっている。訪問目的は「レジャー」8件に次いで、「学習」が3件となっているが、そのうち2件は上記2つを訪れていることから、学校からの遠足的な訪問であったと思われる。

シャトキラ県(13件)はバングラデシュ南西部に位置し、インドと国境を

接している。訪問件数の全てが、広大なマングローブ林が広がる世界自然遺産シュンドルボンを目的地としている。目的は「親族・友人訪問」の1件を除いてすべて「レジャー」となっている。また、目的は「レジャー」だが、学校が企画したとの回答も3件みられた。

バングラデシュ南部、ポッダ川とジョムナ川の2つの大河が合流してベンガル湾に注がれる河口域に位置するポトゥアカリ県(13件)にはクアカタというビーチリゾートがあり、不明1件を除いてすべての訪問先となっている。コックスバザールと並び、クワカタもバングラデシュ国内では有名かつ人気があるビーチといえる。訪問目的は「親族・友人訪問」の1件を除いてすべて「レジャー」である。

バングラデシュ北部のボグラ県(12件)での主要な訪問地はモハスタン(モハスタンゴル)である。最初期の歴史は紀元前3世紀にも遡るとされるが、特に8世紀中からのパーラ朝(仏教)や11世紀末からのセーナ朝(ヒンドゥー教)時代の遺跡群があり、出土品を展示する博物館も併設されている。この他、学科で企画されて教員が引率した農村開発アカデミー(Rural Development Academy/1974年設立)への訪問も4件みられた。訪問目的は「レジャー」が4件、「学習」が7件となっているが「学習」としてモハスタンを訪問しているケースもみられるので、農村開発アカデミーへの訪問とともにモハスタンへも訪れていたものと思われる。

ダカ管区内に位置するガジプル県(12件)ではバワル国立公園が主要な訪問地となっている。植物相、動物相ともに豊かな自然公園であり、ピクニック・スポットやレストハウスなども備えている。また、教員引率によるバングラデシュ米研究所(Bangladesh Rice Research Institute/1970年設立)への訪問も3件みられた。訪問目的としては、バワル国立公園についても教員引率が含まれることもあり、「学習」が8件、「レジャー」が2件などとなっている。

ナラヨンゴンジ県(12件)もダカ管区内に位置しているが、その主要な訪問地は古都ショナルガオン(ショナルガオ)である。歴史はさらに遡るものの、とりわけ12世紀以降にセーナ朝のもとで発展した。ただし、当時の様子をうかがうことができる事物を欠くことから、訪問先としては近代以降の展示

を有するショドルバリ博物館 (Sadarbari Folk Art and Crafts Museum) や、かつてのヒンドゥー教徒の富豪の邸宅が残るパノム・ノゴルなどである。訪問目的は「レジャー」6件、「学習」4件となっているが、「学習」の方も1件を除いて訪問先はショナルガオである。

ラジシャヒ県 (11件) は、バン格拉デシュ西部にあってインドと国境を接している。訪問地に関する回答は、ラジシャヒ大学4件、ボレンドロ博物館3件、単に「ラジシャヒ」との回答が3件などとなっていた。ラジシャヒにはかなりの規模を誇る総合大学ラジシャヒ大学があり、「大学町」と称されることもあるために、大学自体が訪問先となっていると思われる。ボレンドロ博物館もラジシャヒ大学の傘下であり、モヘンジョダロ遺跡からバン格拉デシュ域内の遺跡までを含む多様な展示を有する。「ラジシャヒ」との回答の中身としては、ボッダ川や自然の美しさが挙げられている。訪問目的は「レジャー」が5件、「親族・友人訪問」が4件となっている。

以上、10件以上の訪問件数があった訪問地について、県別に検討した。また、あらためて2件以上の訪問件数についてみると、訪問地はバン格拉デシュの8つの管区すべてに広がり、64ある県のうち36県に渡っていることが分かる。1件のみの訪問件数があった県は17県であるので、これを加えると64県のうち、53県が訪問対象となっており、回答は学生のみによるものとはいえ、バン格拉デシュの全域に近い広がりをみせている。

県別の動向を観光資源の特徴も踏まえて整理すると、大まかに以下になるであろう。まず第1に、訪問件数が最も多いコックスバザールはビーチリゾートとして特徴付けられるが、この点ではボトゥアカリ県のクアカタやチッタゴン県のポテンガなども同様に人気のビーチリゾートとして認識され多くの訪問者を集めている。ビーチリゾートはバン格拉デシュの人々にとってひとつの定番の観光地となっているといえよう。第2に、首都ダカがひとつの観光圏として成立しており、その観光資源はラルバグ・フォートやアフシャン・モンジル博物館などムガル朝から近代にかけての歴史遺産と国立博物館、動物園、民間遊園地などの都市型施設の2つの大きなカテゴリーとして存在している。これらに加えて日帰りが十分に可能なサバルの独立

記念碑やナラヨンゴンジ県のショナルガオンもダカ観光圏に組み入れられているとみてよいであろう。

第3に、バングラデシュにはインドにおけるような、イギリス統治時代から開発が進んで歴史も古く、規模も大きなヒル・ステーション(高原保養地)は存在していないものの、シレット県のジャフロンやマドブクンドなどが風光明媚な森林、河川、滝などの自然景観を堪能できる場所として認識されており、ヒルステーション的な性格を有する訪問先としてひとつのカテゴリーができています。第4には、こうした自然景観を有しながら、加えて多様な少数民族が暮らす丘陵地帯については別カテゴリーとして設定できうるであろう。これにはチッタゴン丘陵地帯が含まれる。

第5には、クミッタ県のモエナモティ遺跡やボグラ県のモハスタン遺跡など8世紀以降のパラ朝に関わる仏教遺跡群と博物館、ディナジプル県のカントノゴル・ヒンドゥー教寺院、さらにはラジシャヒ県のポレンドロ博物館なども含めて、イスラーム以前の仏教・ヒンドゥー教に関わる歴史遺産を挙げることができる。これらは海外からの観光客向けにも訪問地となっている。

最後に、シャトキラ県の世界自然遺産シュンドルボンやガジプル県のバワル国立公園(自然公園)のように、制度的な保護対象となっている自然資源を挙げることができる。

(4) 訪問地(訪問地点別)

図表8「訪問地(訪問地点別)」は訪問地について、あらためて具体的な訪問地点別に整理したものである。ここでは訪問件数で3件以上あった地点を取り上げる。また、訪問地(県別)には入っていなかった訪問地点については○印を付記している。○印の訪問地点の意味はつまり、単体の訪問地点としてはそれなりの訪問件数があったにもかかわらず、県別でみた場合にはその訪問地点以外に主要な訪問地点を有しないために、県別の整理では取り上げることができなかった訪問地ということになる。なお、訪問地の性格上、ここでも訪問地点を県名で代替している場合がある。

図表8からは、前節で整理したものと同様に、バングラデシュの観光訪問

図表8 訪問地(訪問地点別)

観光資源	訪問 件数	特 徴	県別訪問 地には入っ ていなかったもの(○)
コックスバザール	45	ビーチリゾート	
ネトロコナ	20	大学の学科主催の現地調査	
クアカタ	13	ビーチリゾート	
ラルバグ・フォート	13	ムガル朝の歴史遺産	
シュンドルボン	13	マングローブ林(世界自然遺産)	
ジャフロン	12	ヒル・ステーション(高原保養地)	
モエナモティ	12	7-13世紀の仏教遺跡群	
ショナルガオン	10	セーナ朝の古都・近代以降を展示する博物館	
シャト・ゴンブジ・モスジト	8	15世紀のモスク群(世界文化遺産)	○
ランガマティ	7	丘陵や湖の自然景観・仏教・少数民族	○
モハスタン	7	8-12世紀の仏教・ヒンドゥー教遺跡群	
マドブクンド	6	滝が有名な景勝地	
ポテンガ	6	ビーチリゾート	
シャバール	6	独立記念碑	
バンドルバン	5	丘陵や湖の自然景観・仏教・少数民族	○
バワル国立公園	5	自然公園	
チッタゴン丘陵地帯	5	丘陵や湖の自然景観・仏教・少数民族	
バングラデシュ国立博物館	5	博物館	
パハルプル	5	8世紀の仏教遺跡群(世界文化遺産)	○
ショブノプリ・人工遊園地	5	アミューズメント・パーク	
ゴジニ	4	丘陵や湖の自然景観・少数民族	○
カントノゴル寺院	4	18世紀のヒンドゥー教寺院	
ラジシャヒ大学	4	大学	
タージマハル	4	ムガル朝の歴史遺産(世界文化遺産)・インド	
アフシャン・モンジル博物館	3	博物館	
バングラデシュ米研究所	3	教員引率による学外学習	
ファンタジー・キングダム	3	アミューズメント・パーク(遊園地)	
ジョシヨル・カントンメント	3	軍の宿营地	○
ラワチャラ国立公園	3	自然公園	○
ラジシャヒ	3	ポッダ川・自然景観	
ボレンドロ博物館	3	博物館	

地は主要な6つのカテゴリーに特徴付けられることが改めて分かる。第1にコックスバザール、クアカタ、ポテンガなどのビーチリゾートがある。第2にラルバグ・フォートやアフシャン・モンジル博物館などのムガル朝から近代

論文

にかけての歴史遺産や博物館・民間遊園地などの都市型施設から構成される首都ダカ内の訪問地とシャパールやシヨナルガオンなどの近郊をあわせたダカ観光圏が存在している。

第3に、規模も歴史も浅いものの森林や滝などの自然景観を堪能できるジャフロンやマドブクンドなど、ヒル・ステーション的な性格を有する保養地を挙げられる。

第4には、同様に豊かな自然景観を有しながら、多様な少数民族が居住する丘陵地帯がある。これにはチッタゴン丘陵地帯（訪問件数7件）に加えて、図表8に○印が付けられているランガマティ（同7件）、バンドルバン（同5件）、ゴジニ（同4件）などを挙げることができる。前者2つはチッタゴン管区、後者はモエモンシンホ管区に属している。これらをすべて合わせると、訪問件数は21件となり、第3カテゴリーのジャフロンとマドブクンドを合わせた18件よりも多くなることから、やはりひとつのカテゴリーとして設定が可能であろう。

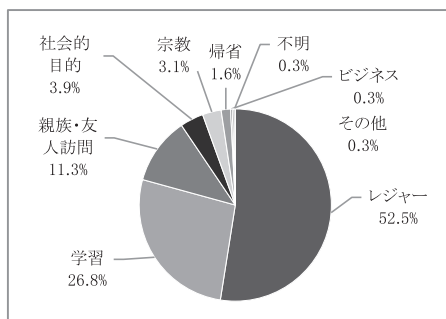
第5には、モエナモティやモハスタンなどの仏教遺跡群、カントノゴルのヒンドゥー教寺院、ボレンドロ博物館などのイスラーム以前の仏教・ヒンドゥー教に関わる歴史遺産を挙げることができる。図表8では、このカテゴリーには世界文化遺産のパハルプル（訪問件数5件）を加えることができる。さらに、このカテゴリーに関しては、図表8で訪問件数が8件となっている世界文化遺産シャト・ゴンブジ・モスジト（15世紀のモスク群）を加えて、イスラーム以前・以降の宗教的伝統に関する歴史文化遺産として括り直すことも可能であろう。

最後の世界自然遺産シュンドルボン、バワル国立公園などの制度的な保護対象となっている自然資源に関しては、図表8からはラワチャラ国立公園を加えることができる。

（5）訪問地（海外）

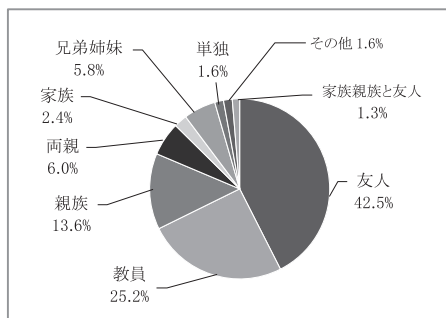
海外については、インドのタージマハルへの訪問が4件、同じくインドの Kolkata への訪問が1件のみであった。訪問目的はすべて「レジャー」である。

(6) 訪問目的と同行者



図表9 訪問目的

訪問目的と同行者の動向について確認した後に、これらと具体的な訪問地との組み合わせについても検討してみたい。まず、訪問目的に関しては、図表9「訪問目的」が示すとおり、「レジャー」が52.5%と訪問目的の過半数を占めていることを指摘できる。その一方で、回答者が大学生であることから、所属する学科や大学入学前の学校の企画による「学習」が26.8%と4分の1以上を占めていることも特徴的である。「学習」の割合が高いことは、



図表10 同行者

図表10「同行者」において、「教員」が同行した割合が25.2%とやはり4分の1程度になっていることと対応している。このほかには、「親族・友人訪問」が11.3%、「社会的目的」が3.9%、「宗教」が3.1%、「帰省」が1.6%、「ビジネス」が0.3%となっている。「親族・友人訪問」とはいわゆるVFR (visiting friends

and relatives) を指しており、開発途上国では重要な観光目的のひとつとされてきたものである。「社会的目的」には結婚式や葬儀などへの参加などが含まれる。学生でありながら「ビジネス」との回答は1件のみで、詳細は不明だがビジネス・パートナーと同行したとのことであった。

同行者に関しては、図表10「同行者」の通り、「友人」との同行が最多の42.5%であった。次いで「教員」の25.2%、「親族」13.6%、「両親」6.0%、「家族(両親と兄弟姉妹)」2.4%、「兄弟姉妹」5.8%、「単独」1.6%となっている。

次に、「訪問目的」、「同行者」、「訪問地」をクロスさせながら検討してみたい。

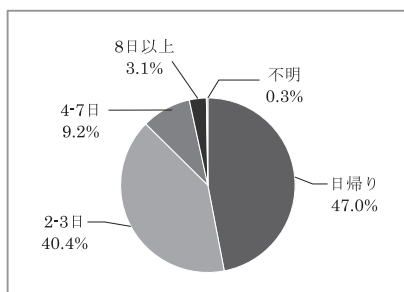
まず、訪問目的で最も大きな「レジャー」に関しては同行者の66.5%が「友人」、14.5%が「親族」、6%が「両親」となっていた。そして「レジャー」目的での「友人」との訪問地は、訪問件数順に19件のコックスバザールを筆頭にラルバグ・フォート、シュンドルボン、クアカタ、ジャフロン、ショナルガオン、タージマハル（インド）、バンダルバンなどと続き、図表8のリストに照らしみると、実にマドブクンド、バワル国立公園、ラジシャヒの3カ所を除く全てを含んでいる。バングラデシュにおける観光目的の半数以上を占める「レジャー」の7割近くが「友人」との観光であり、その行動範囲も国内全域に渡っていることは予想外の結果であった。「親族」と同行した「レジャー」の訪問地は、コックスバザール、ジャフロン、マドブクンド、国立博物館など、「両親」と同行した訪問地はクアカタ、モハスタン、コックスバザールなどであった。

訪問目的「学習」に関しては、その同行者の88.2%が「教員」、7.8%が「友人」となっている。訪問地としては、すでに述べたネトロコナ（貧困状況調査）、バングラデシュ米研究所、バングラデシュ農村開発アカデミーなどの学習機会を提供する場所や機関に加えてコックスバザール、モエナモティ遺跡、ランガマティ、モハスタン遺跡、ショナルガオンなどの遠足的な訪問地点が含まれている。

訪問目的「親族・友人訪問」の同行者は、32.6%が「親族」、27.9%が「友人」、16.3%が「両親」、14.0%が「兄弟姉妹」、4.7%が「単独」であった。ここでも「友人」との同行が3割近くと一定の割合を占めている点が特徴的である。ちなみに、宿泊先をあわせて検討すると、「友人」を伴う全12件のうち、5件が親族宅、4件が友人宅、3件が宿泊なし（日帰り）であった。親族宅を訪問する際に自分の友人を伴ったり、地方出身の友人の実家を訪ねたりという形での訪問も行われているのである。

（7）期間、交通、手配者、宿泊

図表11「期間」は観光を行った日数を示している。「日帰り」が47.0%と半数近くを占め、続いて「2-3日」40.4%、「4-7日」9.2%、「8日以上」3.1%となっている。日帰りでの訪問地には首都ダカとその近郊の観光圏に所在するラル

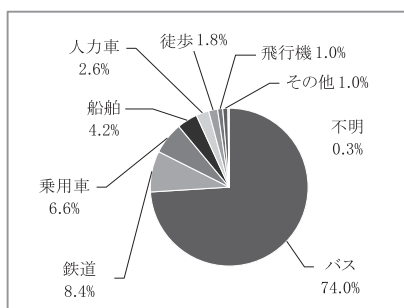


図表11 期間

バグ・フォート、シヨナルガオン、シャパール、国立博物館、ファンタジー・キングダムなどが含まれるが、他方でモエナモティ遺跡、シャト・ゴンブリ・モスジト、コックスバザール、ポテンガなども含まれる。これらのダカからは遠方にある訪問地については、出身地（実家）がそれぞれの訪

問地の近くにあるので日帰り訪問したと思われるケースがみられる。

「日帰り」に関してはさらに留意が必要である。調査票の「期間」に対する回答者の解釈が、全行程に関する期間ではなく、当該の訪問地のみを訪問するのに要した期間（例えば2泊3日の旅程で複数箇所を巡ったが、その訪問地には半日しかかけていないなど）となっていた可能性も否定できない。後述する図表14「宿泊施設」においては、「宿泊なし」との回答は33.3%であった。むしろこちらの数値を実質的な「日帰り」と考えるべきかもしれない。

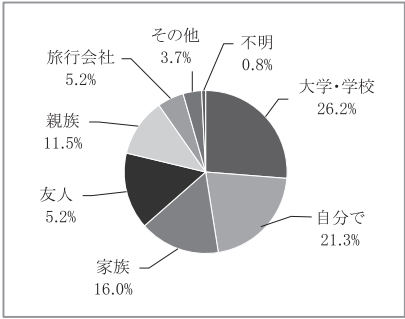


図表12 交通機関

図表12「交通機関」はバングラデシュの交通事情を反映しているといえよう。バングラデシュでは鉄道網はあまり発達しておらず、個人が移動する場合には道路輸送が中心となっていることから、「バス」による移動が74.0%となっている。「バス」に次いで、「鉄道」8.4%、「乗用車」6.6%、「船舶」4.2%、「人力車」2.6%、「徒歩」

1.8%、「飛行機」1.0%となっている。道路輸送に関しては、訪問目的の半分が「レジャー」（その7割近くが「友人」との訪問）、4分の1が「学習」（教員が同行）であることから、費用の観点から「乗用車」よりも「バス」がより多く利用されていると思われる。バングラデシュでは、場所によっては船舶の移動も発達しているが、船舶のみで移動できる訪問地は限られる。「飛行機」は主

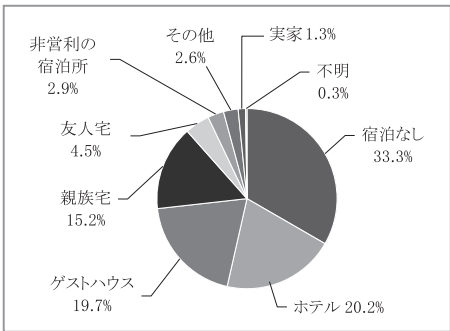
要な都市には路線があるが、時間さえかければバス移動も可能なため、ここでも費用の観点からあまり選択肢とはなっていないように思われる。



図表13 手配者

図表13「手配者」は、誰が各地への訪問の準備・手配したのかに関する回答である。「大学・学校」が26.2%と最も多く、次いで「自分で（手配した）」が21.3%、「家族」16.0%、「友人」15.2%、「親族」11.5%、「旅行会社」5.2%となっている。「大学・学校」が26.2%と4分の1程度を占めている点は、「訪問目的」のなかの「学習」、「同行者」のなかの「教員」が同程度となっている点と対応している。「自分で」手配した場合の「同行者」の77.8%は「友人」、「家族」が手配した場合の「同行者」の83.6%は「家族」「兄弟姉妹」「親族」、「友人」が手配した場合の「同行者」の94.8%は「友人」、「親族」が手配した場合の「同行者」の79.5%は「親族」であった。つまり、「友人」と一緒に動く場合には自分または友人が手配を行い、「家族」「兄弟姉妹」「親族」と一緒に動く場合には、家族や親族が主として手配している。

「旅行会社」が手配したケースは5.2%と少ない。2010年の調査時点では、オンラインの予約サイトはまだまだ未発達であり、交通や宿泊の手配はそれ



図表14 宿泊施設

が誰であれ、個別にチケット購入や予約対応をしていたと考えられる。

図表14「宿泊施設」は宿泊の有無と宿泊した場合の宿泊施設の種別について示している。「宿泊なし」33.3%、「ホテル」20.2%、「ゲストハウス」19.7%、「親族宅」15.2%、「友人宅」4.5%、「非営利

の宿泊所」2.9%、「実家」1.3%となっている。「宿泊なし」が最多で33.3%となっているが、すでに触れたとおり、先に図表11「期間」において、「日帰り」は47.0%となっていたことと齟齬がある。これは、「日帰り」と回答したにもかかわらず、宿泊に関しては「宿泊なし」とはせずに宿泊種別を記入した回答者が一定数存在するためである。

「訪問目的」の観点からすると、「宿泊なし」の63.0%が「レジャー」、31.5%が「学習」となっており、この2つが大半を占めている。「ホテル」利用の80.5%が「レジャー」、15.6%が「学習」を目的とする一方で、「ゲストハウス」利用の方は54.7%を「学習」、37.3%を「レジャー」が占めており、ある程度の明確な使い分けがなされている。「親族宅」に関しては、「親族・友人訪問」が44.8%を占めているが、ほかにも「レジャー」「社会的目的」「宗教」などでも利用されていることが特徴となっている。「友人宅」では、52.9%が「レジャー」で、そのほかには「親族・友人訪問」「社会的目的」で利用されている。

このように宿泊に関しては、宿泊を伴う観光は全体の3分の2程度であること、ホテルやゲストハウスなどの商業施設を利用した観光をあわせて4割程度であること、そして「親族宅」や「友人宅」が「親族・友人訪問」以外の「レジャー」目的などでも利用されていることなどを特徴として指摘できる。

5. 考察—インドにおける質問紙調査との比較を含めて

(1) 訪問地

ここでは同時期にインドの首都デリーで実施した質問紙調査[中谷 2014]との比較も含めて、バン格拉デシュにおける調査結果について考察を加えておきたい。まず、デリーでの調査について簡単に述べておくと、調査対象はデリー大学傘下のカレッジと大学院の学生で、回答者は学部生66名と大学院生18名の計84名、過去5年間ににおける観光経験に関する回答数は計353件、一人平均4.2回の観光経験を有しており、ダカにおける調査とほぼ同等のサンプル数となっている。属性の特徴としては、世帯主の職業に関して、「ビジネス」が35.7%と最も多く、次いで「給与所得者(公務員)」が31.0%、「給与所得者(民間)」が11.9%、「専門職」が11.9%となり、これらで全体の90.5%を

占めていることがある。ダカでの調査では、これらの職業の合計は69.9%である。また、ダカでの調査では13.3%を占める「農業」や6.0%を占める「賃労働者（農業）」について、デリーでは前者は1.2%（「農業とビジネスを兼業」と回答の1サンプルのみ）、後者は0%（回答者なし）であった。デリーでの調査対象世帯の方がより、自ら事業を営む自営業者やホワイトカラー層が中心となっている。所得階層に関しては、前述のインド国立応用経済研究所による所得階層の分類に照らすと、98.2%が中所得層以上、80.3%が高所得層となっていた。

さて、ダカにおける質問紙調査結果についてであるが、まず「訪問地」の特徴は、4章4節で述べた通り、以下の6つに分類することができる。

- ①ビーチリゾート
- ②首都ダカ観光圏
- ③ヒル・ステーション（高原保養地）
- ④少数民族居住地を含む丘陵地帯
- ⑤宗教的伝統に関する歴史文化遺産
- ⑥制度的な保護対象となっている自然資源

繰り返しとなる内容も多いが、あらためてそれぞれの特性について確認しておきたい。①はコックスバザール、クアカタ、ポテンガなどのビーチリゾートであり、訪問件数ではこのカテゴリーが最も多くを占めている。ビーチはバングラデシュでは最もメジャーな訪問地と言ってよいであろう。②はラルバグ・フォートなどのムガル朝から近代にかけての歴史遺産や博物館・民間遊園地などの都市型施設から構成される首都ダカ内の訪問地、及びシャバルやシヨナルガオンなどの近郊をあわせた訪問地であり、これらをもってダカ観光圏が成立しているとみることができる。③はジャフロンやマドブクンドなど、ヒル・ステーション的な性格を有する保養地である。国土全体が河川デルタ地域に重なるバングラデシュでは、こうしたヒル・ステーション的な景観は希少であり、人気の訪問地となっている。

④は、③と同様の豊かな自然景観を有しながら、多様な少数民族が居住する丘陵地帯である。バングラデシュではエスニック・グループとしてはベン

ガル人が大半であり、少数民族（tribal）は全人口の1.1%、約158.6万人にすぎない[Bangladesh Bureau of Statistics 2020: 52]。しかし少数民族の分布には偏りがあり、訪問地として挙がっていたバンドルバンやランガマティをはじめとするチッタゴン丘陵地帯に多数が居住している。仏教徒であるチャクマ族やマルマ族、ヒンドゥー教徒主体のトリプリ族ほか、多様な少数民族が暮らしており、これらの人々の存在も観光資源となっている。

⑤はモエナモティ、モハスタン、パハルプルなどの仏教遺跡群やカントノゴルのヒンドゥー教寺院など、イスラーム以前の仏教・ヒンドゥー教に関わる歴史遺産、及びイスラーム以降の歴史遺産としてシャト・ゴンブジ・モスジトなどを含む。これらの一部はユネスコの世界文化遺産に登録されており、宗教的伝統に関する歴史文化遺産としてまとめることができるであろう。最後の⑥にはシュンドルボン、バワル国立公園、ラワチャラ国立公園などが含まれる。③や④のような自然景観とは異なり、世界自然遺産や国立公園として、制度的な保護対象となっている自然資源である。特に世界自然遺産に登録されているシュンドルボンは、すでに述べたように世界観光機関の調査団によっても高く評価されているが、国内においてもバン格拉デシュの主要な観光資源として広く認識されている。

次に訪問地の特徴について、デリーでの調査との比較を行っておきたい。まず、デリー調査においても、ダカでの調査結果同様に訪問地はインド全土に分散していた。インドはバン格拉デシュよりも遙かに広大な領域をおさめていることから、観光資源も多種多様である。よって、ダカ調査では第1の訪問地となっていた①ビーチリゾートに関しては、個別の訪問地に関する訪問件数では西インドのゴアが第3位となっているものの¹⁰、他には主要な訪問地としてビーチリゾートは挙がっておらず、ビーチリゾートはバン格拉デシュにおけるほど重要な訪問地とはなっていない。観光資源の種類や数に制約のあることも、バン格拉デシュにおいてビーチリゾートが貴重な訪問先となっていることに影響していると思われる。

デリー調査においても、調査対象となったカレッジや大学院が所在する首都デリーは個別の訪問地としては11番目に訪問件数が多く、主要な訪問地

のひとつとなっている。デリーには13世紀以降のデリー・スルターン朝から16世紀以降のムガル朝に及ぶ歴史遺産が豊富であり、2つの世界文化遺産を有している。しかし、観光資源が豊富なインドでは、歴史遺産に関してもデリーが特別に出色している訳ではない（例えばムガル朝の最も有名な遺産であるタージマハルはアーグラに所在する）。こうした観点からすると、有力な観光資源に乏しいバングラデシュにおいては、決して豊富な資源を有しているとはいえない②首都ダカ観光圏が、（ビーチリゾート同様に）相対的に主要な訪問地とならざるを得ない状況にあると考えられる。

観光圏という点では、デリーの場合にはその周辺を含めたデリー観光圏を形成しているとはいいがたいが、西部のラージャスターンやアーグラ方面にもアクセスが良いため、移動の起点・中継点としての役割を担っている。デリーの場合には明確ではなかった点に関しては、ダカでは博物館・民間遊園地などの都市型施設も訪問地として挙がっていたことがある。

③ヒル・ステーションは、デリー調査において最も重要かつ特徴的なカテゴリであった。インド亜大陸の北寄りに位置するデリーの特性も大きく影響していると思われるが、デリー北方のランズダウン、マスーリー、シムラー、ナイントールなど、日本のガイドブックでは主要な観光地としてはあまり紹介されないようなヒマラヤ山麓の高原保養地・避暑地がかなりの人気の高さを誇っていた。これらの多くはイギリス統治時代からのヒル・ステーションとしての長い歴史を有する。また、ヒマラヤ山嶺のヒンドゥー教の聖地が高原保養地を兼ねている訪問地もある。高原保養地・避暑地はこれら以外にも、ヒマラヤ山脈を臨んで東側にも成立しており、ダーズリンやシロンなども主要な訪問地の一部を構成している。このようにヒル・ステーションに関しても、インドとバングラデシュではその歴史・規模・数において比較にはならないが、高原的な景観を楽しめ、インドのヒル・ステーションほどではないにせよ、平地の酷暑よりは少しはましな避暑地が愛好される点において、両国共通の訪問地カテゴリを成しているといえるであろう。

④少数民族居住地を含む丘陵地帯に関しては、インドではバングラデシュよりもさらに多くの少数民族が存在している。訪問件数としては少ないもの

の、州自体が多数の少数民族から構成されるメガラヤ、シッキム、ナガランド、マニプルなどの諸州が州別訪問地として挙げられている。これらはすべてインド北東部の山間地域に位置しており、バングラデシュにおけるのと同様に少数民族の文化が観光対象となっている。規模と多様性は遙かに劣るものの、これもインドと同様の訪問地カテゴリーを構成している。

⑤宗教的伝統に関する歴史文化遺産に関しては、デリー調査においても様々な宗教伝統に基づく歴史文化遺産が訪問地となっており、訪問地のカテゴリーとしては共通している。ただし、インドにおいては歴史文化遺産というだけではなく、現在でも信仰対象となっている施設、例えばパンジャブ州のシク教の聖地や先述のようなヒマラヤ山嶺に位置して氷河を臨むような高地にあるヒンドゥー教聖地への「宗教目的」の訪問も少なからずみられる点は異なっている。これらの宗教的聖地が「レジャー」的な要素も含みながら、インドではひとつの訪問カテゴリーとして確立している。この違いについては、次節であらためて検討する。

⑥制度的な保護対象となっている自然資源に関しては、インドにおいても多数の国立公園や世界自然遺産があるにも関わらず、デリー調査では、インド北東部のアッサム州のカジランガ野生動物保護区、虎の保護区としても有名な北部のウッタラカンド州のジム・コルベット国立公園、東部のオディシヤ州のシムリパル国立公園などがわずかに挙げられているのみであった。バングラデシュにおいては、このカテゴリーがインドよりも確立しているといえよう。ただし、この点に関しても、観光資源が豊富なインドでは相対的に自然資源に関するこのカテゴリーの位置づけが低いという見方も可能であろう。

最後に、訪問地に関しての最も大きな差違は「海外」への渡航であると指摘できる。ダカでの調査においては、海外渡航はわずか4件で、訪問先のすべてがタージマハルであった。これに対して、デリーでの調査においては、計23件の海外渡航がみられた。訪問先は、タイ、イギリス、米国、カナダ、ネパール、アラブ首長国連邦、フィリピン、シンガポールなど多岐にわたっていた。イギリス、米国、カナダなどはインド系の移民を多く抱える国々で

あり、現地に居住する親族・友人を訪ねる形での「レジャー」となっているが、南アジアの他国や東南アジアについては、より純粋に「レジャー」目的の渡航が行われている。このような差違は、デリー調査の対象者が大きく高所得層に偏っていることや、海外との繋がりという社会関係資本の有無がダカ調査の回答者とはかなり異なっていることに基づくと思われる。

(2) 訪問目的

4章6節の図表9「訪問目的」が示すとおり、ダカ調査においては、「レジャー」が52.5%と訪問目的の過半数を占めていた。デリー調査においても同様に、「レジャー」は53.8%を占めており、この点は共通している。インド国立応用経済研究所がかつて2002-3年に実施した『国内観光調査』[National Council of Applied Economic Research 2002-3: 13]では、「社会的目的」が6割近くを占めていたことと比べると、インドでは観光は「社会的目的」から「レジャー・ホリデー」へと大きく転換していると指摘できるが[中谷 2014: 17]、このような転換はバングラデシュにおいてもおそらく同様に生じているとしても間違いではなかろう。他方で、開発途上国では一般的とされる「親族・友人訪問」についても、ダカ調査では11.3%、デリー調査でも11.3%となっており、全体的な割合としては大きくはないものの、ひとつの確固とした目的として機能している。

2つの調査における相違としては、ダカ調査では「学習」の割合が26.8%と高いのに対して、デリー調査では4.5%と低いことを指摘できる。このような教員引率による訪問件数を除くと、ダカ調査での総訪問件数はかなり減少することとなる。この点からするとバングラデシュにおいては教育旅行的な訪問が観光全体において、かなりの役割を果たしているといえる。

もうひとつの差違として、ダカ調査では3.1%であった「宗教」目的がデリー調査では10.5%となっていることがある。ともに割合としては大きくはないものの、前節で述べたようにデリー調査では宗教的な聖地が訪問地のひとつのカテゴリーとして確立しており、無視できない存在となっている。ダカ調査では「宗教」目的としていても、宗教的な集会に参加したとの回答が2件あ

るのみで、具体的な訪問地に関する情報は乏しい。ただし、この点はバングラデシュではイスラーム教徒が9割を占めることが関係していると考えられる。イスラーム教では偶像崇拜が禁じられている。ヒンドゥー教のように各地に、多彩な神々にちなむ寺院や聖地があるわけではない。バングラデシュにおいても聖者信仰は存在し、著名な聖者の廟が参拝者を集めている例はあるものの、その数は決して多くはなく、また聖者信仰に関する人々の考え方も様々である。よって、歴史文化遺産は別として、宗教目的での参拝対象となるような訪問地に乏しいという事情があろう。

(3) 同行者、期間、交通、手配者、宿泊

「同行者」に関しては、2つの調査で大きな違いがみられる。デリー調査では「両親」「家族」「親族」「兄弟姉妹」などの家族・親族単位での訪問が全体の55.7%と過半数を占めているのに対し、ダカ調査ではこれが27.8%である。家族親族等との観光行動が3分の1に満たない点は、ひとつの特徴といえよう。

ダカ調査で最も多くを占めたのは42.5%を占める「友人」であった。差違の程度は大きいものの、デリー調査においても「友人」は26.3%を占めていた。主要な同行者として「友人」が重要なことは両調査に共通している。さらに、デリー調査においては「レジャー」目的で、友人同士と宿泊を伴う訪問をしているケースがかなりみられたが、ダカ調査においても同様に「レジャー」を目的として友人とバングラデシュ全域を訪問し、その半数は宿泊を伴っている状況があり、この点も共通している。加えて、親族宅を訪問する際に自分の友人を伴ったり、地方出身の友人の実家を訪ねたりという形態がみられることも両調査に共通している。

「期間」については、ダカ調査では「日帰り」が47.0%を占めているのに対して、デリー調査ではこれが10.8%にすぎない点が大きく異なっている¹¹。宿泊した場合の日数については、「2-3日」についてはダカ調査では40.4%、デリー調査では35.4%とあまり大きな差はない。しかし4日間以上の訪問に関しては、ダカ調査では全体の12.3%を占めるにすぎないのに対して、デリー

論文

調査はこれが53.5%となっている。この背景には、インドの方が圧倒的に広い国土を有しており移動に日数がかかることや、デリー調査のサンプルの方は高所得層が多く、より高額の旅費用を賄うことが可能となっているであろうことなどが関わっていると思われる。

「交通機関」に関しては、バス移動が74.0%と圧倒的なダカ調査に対して、デリー調査では「乗用車」30.0%、「鉄道」24.6%、「飛行機」20.7%であり、「バス」移動は21.0%にすぎない。インドでは、自動車専用道路を含めて道路整備が進められていること、ヒル・ステーションのような山間部ではもっぱら「乗用車」が利用されること、鉄道網や航空網が発達していることから、広い国土での遠距離移動に適した「鉄道」や「飛行機」が活用されていることなどがこうした相違の要因となっている。

「手配者」における大きな相違は、ダカ調査においては「大学・学校」が26.2%と最も割合が高いことであるが、これは「訪問目的」や「同行者」とも対応しているところである。また、ダカ調査の方では「友人」を同行者とする件数が多いことと対応して、「手配者」の方も「友人」の割合が15.2%と、デリー調査における4.2%よりも高くなっている。こうした傾向を反映するように、「家族」による手配はデリー調査の36.0%に対して、ダカ調査では16.0%とかなり低くなっている。「旅行会社」の利用がデリー調査では19.5%に対して、ダカ調査では5.2%となっている点にも相違がみられる。

最後に「宿泊施設」に関しては、ダカ調査においては「宿泊なし」との回答が33.3%であるのに対して、デリー調査ではこれが6.5%となっている点が特徴的である。また、「ホテル」「ゲストハウス」などの商業宿泊施設の利用が、ダカ調査ではあわせて39.9%であるのに対して、デリー調査では57.0%となっている点も大きく異なっている。「親族宅」と「友人宅」に関しては、ダカ調査ではそれぞれ15.2%と4.5%であったのに対して、デリー調査では17.3%と5.4%であり、同様の傾向を示していた。これらはともに、「訪問目的」のなかの「親族・友人訪問」や「社会的目的」と対応している。

6. おわりに

バン格拉デシュでの質問紙調査においては、過去5年間で観光経験（観光実施回数）に関して、回答者一人あたりで平均4.6件の回答を得たが、これはインドにおける同4.2件を上回るものであった。訪問目的に関しては、インド同様に「社会的目的」や「親族・友人訪問」の割合は低く、「レジャー」が半数を超えており、余暇を過ごすための移動が人々の関心となってきたことが分かる。訪問地に関しても、バン格拉デシュ全域に渡っていることから、国内観光の領域も広範に及んでいる。1990年代以降、所得分配の格差はあるものの人々の世帯所得が向上してきたなかで、バン格拉デシュの国内観光が拡大してきたことは確かであろう。質問紙調査の回答者の世帯主には、全国統計よりもより多くの給与所得者が含まれていたが、特にこのような人々の間では仕事と余暇の領域が弁別されるライフスタイルも定着し、余暇における観光への関心も高まっているのではないだろうか。

大学生に対する質問紙調査では、おのずとその結果にも限界がある。しかし、多様な観光経験が明らかになった本調査の結果からは冒頭の問題意識、すなわち経済成長とともに消費が拡大し、その対象はモノ消費だけではなく、観光のようなコト消費にも及んで、人々の生活やライフスタイルの一端を形づくっているのではないかという点に関して、インド同様にバン格拉デシュにおいても、こうした実態が顕著であることを示すことができたと考えたい。

ただし、インドでの調査と比べて「学習」目的での訪問の割合が多いことや、「海外」への訪問が少ないことは大きく異なっていた。つまり、バン格拉デシュでは教育旅行的な訪問が観光全体の中で占める役割が大きいこと、海外よりも国内観光が圧倒的に主流であることを指摘できる。後者の点に関しては、バン格拉デシュの国土は狭く、おのずと観光資源は限られており、そのクオリティもけっして高いとはいえないことから、今後さらに人々の所得が向上し、観光への関心が高まっていけば、国内よりもむしろ海外渡航（アウトバウンド）へと関心が向けられる可能性も考えることができる。

これと関連して、イスラーム教徒が大多数を占めるバン格拉デシュでは、ハッジやウムラなどの海外巡礼の慣行があり、とりわけウムラに関しては家

論文

族単位で行うこともあり、観光との親和性も高い。また、インドネシアやマレーシアなど、イスラームの伝統があり食事面での不安がない目的地への関心も高いと思われることから、今後の展望としては巡礼やムスリム・ツーリズムなどの領域でのアウトバウンド観光の拡大も想定できるであろう。

謝辞

本研究は、JSPS 科研費（研究課題番号20510235）による助成を受けたものである。本稿の執筆にあたり、調査に協力してくださったダカ大学の Zobaida Nasreen 准教授と学生の皆さんに深謝いたします。

注

- 1 一般に南アジア（South Asia）地域というと、インド、パキスタン、バングラデシュ、ネパール、ブータン、スリランカ、モルディブの7カ国を指す。しかし国連国際観光機関の統計では、これらに加えてアフガニスタンとイランも含まれている。2010年の統計〔UNWTO: 2012〕では、アフガニスタンとイランのデータは欠落しているので、上記7カ国を合わせた数値となっている。本稿では、南アジア7カ国とはこの7カ国を指すものとする。
- 2 2017年のデータでは、世界の観光客数約13.3億人のうち、南アジア地域（パキスタンのデータは欠落）を訪れたのは2,127万人で全体の1.6%、南アジア地域のなかでバングラデシュを訪れたのは102.6万人で同地域への入り込み数の4.8%を占めている〔UNWTO 2019: 17-19〕。
- 3 同報告書はまた、レジャーや休暇を楽しむためのインバウンドの実数について、いくつかの推計では1万人未満となっていると指摘している〔UNWTO 2010: 15〕。筆者が2010年にダカで営業する地元の旅行会社で聞いたところでは、実際に外国人観光客を扱っている感覚としては、近隣諸国からの訪問者を除くと、純粋なレジャー・休暇目的の外国人観光客はせいぜい毎年3,000人から3,500人といったところであり、近隣のインドやネパールを含めてようやく1万人を超える程度とのことであった。2010年2月2日、インタビュー。
- 4 原文ではpurchasing power parity（購買力平価）と記述されている。文意の趣旨は「購買力が向上している」ことを含意していると思われる。
- 5 International Monetary Fund, World Economic Outlook Database, October 2020より。（2021年1月6日取得、<https://www.imf.org/en/Publications/WEO/weo-database/2020/October>）。
- 6 バングラデシュ統計局による区分では、最貧困ライン（Lower Poverty Line）

とは、食糧と非食糧をあわせた世帯の総支出が「食糧貧困ライン (food poverty line)」と同等または以下である状況を指す。「食糧貧困ライン」とは、一日あたりに必要とされる2,122カロリー／人を得るために必要なコストを意味している。要するに、生存のために必要最低限の栄養を得るための費用を十分に賄えない人々 (世帯) を最貧困層としている。

- 7 The World Bank, Data, Inflation, consumer prices (annual %) -Bangladesh より。(2021 年 1 月 19 日取得、[https://data.worldbank.org/indicator/FP.CPI.TOTL.ZG?end=2019 &locations=BD&start=2000&view=chart](https://data.worldbank.org/indicator/FP.CPI.TOTL.ZG?end=2019&locations=BD&start=2000&view=chart)).
- 8 本調査における調査票は、同時期にインドのデリーにて実施した質問紙調査 (中谷 2014) において用いたものとはほぼ同一である。
- 9 モエモンシンホ管区は2015年にダカ管区の北部が分離されたものであり、2010年の調査当時にはこれを除く7つで管区は構成されていた。
- 10 インドのゴアはビーチリゾートとしても有名であるが、他方で旧ポルトガル領であった歴史を有しており、市街にはユネスコの世界文化遺産に登録されている「ゴアの教会群と修道院群」を抱えるなど歴史文化遺産にも恵まれている。よって、厳密にはゴアへの訪問を、すべてビーチリゾート目的とはできない。
- 11 4章7節で触れたとおり、「期間」と「宿泊」の回答には齟齬がみられる。ダカ調査では、「日帰り」との回答は47.0%であるにも関わらず、「宿泊」の項目で「宿泊なし」との回答は33.3%であった。同様にデリー調査でもこうした齟齬はみられ、「日帰り」は10.8%であるのに対して「宿泊なし」は6.5%であった。

参考文献

- Bangladesh Bureau of Statistics, 2007, *Report of the Household Income and Expenditure Survey-2005*, Dhaka: Ministry of Planning, Government of the People's Republic of Bangladesh.
- Bangladesh Bureau of Statistics, 2011, *Report of the Household Income and Expenditure Survey-2010*, Dhaka: Ministry of Planning, Government of the People's Republic of Bangladesh.
- Bangladesh Bureau of Statistics, 2012, *Statistical Yearbook of Bangladesh-2011*, Dhaka: Ministry of Planning, Government of the People's Republic of Bangladesh.
- Bangladesh Bureau of Statistics, 2015, *Population Monograph of Bangladesh: Age-sex Composition of Bangladesh Population*, Dhaka: Ministry of Planning, Government of the People's Republic of Bangladesh.
- Bangladesh Bureau of Statistics, 2019, *Report of the Household Income and Expenditure Survey-2016*, Dhaka: Ministry of Planning, Government of the

- People's Republic of Bangladesh.
- Bangladesh Bureau of Statistics, 2020, *Statistical Yearbook of Bangladesh-2019*, Dhaka: Ministry of Planning, Government of the People's Republic of Bangladesh.
- Mahmood, Muhammad, 2018, "Middle-income population: slowly running out of puff", *The Financial Express* (2020年12月13日取得, <https://www.thefinancialexpress.com.bd/views/middle-income-population-slowly-running-out-of-puff-1541260569>).
- Ministry of Civil Aviation and Tourism, 2010, *National Tourism Policy*, Dhaka: Ministry of Civil Aviation and Tourism, Government of the People's Republic of Bangladesh.
- 中谷哲弥、2010、「新興国における中間層の拡大と観光—インドにおける国内観光の動向を中心として—」、『地域創造学研究』、5 (奈良県立大学研究季報・第20巻第3号)、127-155頁。
- 中谷哲弥、2012、「ツーリズムのない国—観光事情—」、『地球の歩き方バングラデシュ』(2013-2014版)、ダイヤモンド・ビッグ社、198-199頁。
- 中谷哲弥、2014、「インドにおける中間層と観光の現状—観光行動に関する質問紙調査より—」、『地域創造学研究』、23 (奈良県立大学研究季報・第25巻第1号)、1-36頁。
- National Council of Applied Economic Research, 2002-3, *Domestic Tourism Survey*, New Delhi: National Council of Applied Economic Research.
- UNWTO, 2010, *UNWTO Mission Report: Sustainable Tourism Development- A Proposed Way Forward*, World Tourism Organization.
- UNWTO, 2012, *Tourism Highlights, 2012 edition*, Madrid: World Tourism Organization.
- UNWTO, 2019, *Tourism Highlights, 2019 edition*, Madrid: World Tourism Organization.
- 山形辰史・村山真弓、2014、「特集にあたって (特集：気がつけばバングラデシュ—芽吹く新産業—)」、『アジ研ワールド・トレンド』、231、2-3頁。

<資料：調査票> **Questionnaire on Travel Experience**

Please answer the following questions about your travel experience **of last five times**.

Caution: "Here, travel includes any act like visiting friends and relatives, pilgrimage, study tour, etc."

"Travel includes both international and domestic travels."

Privacy Policy: All answers will be statistically processed, so that any particular answer will not be disclosed as a rule. Data will be used only for academic purpose.

Contact: Prof. Tetsuya Nakatani, Nara Prefectural University, Japan. E-mail: nakatani@narapu.ac.jp

Please answer about you: (☒ or fill in the blanks)

1. Sex ☐male ☐female
2. Ageyears old
3. Religion ☐Muslim ☐Hindu ☐Buddhist ☐Christian ☐others(in detail)
4. Home Address:Upazila/ThanaZila
5. Occupation of your household head (father/guardian)
☐agriculture ☐wage earner (agriculture) ☐salaried (govt.) ☐salaried (private) ☐business/trade
☐professional/self-employed ☐wage earner (non-agriculture) ☐others (in detail)
6. Annual Household Income (including your parents)Taka

Please answer about your travel experiences: (☒ or fill in the blanks)

1. latest travel experience

- 1) Name of Destination
- 2) Major attractions
- 3) When you traveled? In the year of
- 4) What was the purpose of travel?
☐leisure/holiday ☐religious ☐visiting relatives/friends ☐study ☐social (marriage, etc.) ☐business/trade
☐others (in detail)
- 5) Who accompanied with you?
☐father ☐mother ☐brother/sister ☐grandfather/grandmother ☐relatives ☐friends
☐others (in detail)
- 6) How many days you spent there?
☐one day (day trip) ☐2-3days ☐4-7days ☐more than 7 days ☐others (in detaildays)
- 7) How did you get there?
☐by rail ☐by bus ☐by car ☐by air ☐on foot ☐others (in detail)
- 8) Who arranged your travel?
☐travel agents ☐by yourself ☐family member ☐friends ☐relatives ☐neighbors ☐school
☐others (in detail)
- 9) What kind of accommodations you stayed over?
☐hotels ☐guest house ☐non-commercial inn (religious, etc.) ☐relatives' home ☐friends' home
☐others (in detail) (以下省略)

